



教えるということ

まだ幼い、おそらく小学生くらいの時分、将来は絶対に教師にはならないという決意に似たようなものが心の中にありました。正直なところ、なぜだかはよく覚えておりません。確かに嫌いな先生はいたような気はしますが、そこまでイヤになる仕打ちを受けたかというところでもない気がしますし、ひょっとすると、少々失礼ですが、熱心な先生がなんとなく鬱陶しいと思ってしまったのかもしれませんが。今思えばなんて暗い少年だと苦笑いするしかないのですが、なんとなく当時は、運動が嫌いだったなど他の要因も重なって、周囲とのコミュニケーションをなるべく避けて生きて行こうとしていた気がします。このように自己分析してみると、要するにあまりポジティブな理由なしに「人」ではなく「物」に接して生きて行きたいと考えていたようです。ところが当然、そんな安易な考え方を許容する社会など、筆者の生まれ育った田舎（人口1万人程度の小さな町です）にはありません。1 km 走るのすら嫌いであった筆者が、バスケットボールの試合をフル出場できるようになる程度に運動する機会も、そういった活動を通じた人と接する機会も与えられ、前述のような感情も次第に薄れていき、つい最近までそんなことを考えていたことすら完全に忘失しておりました。

しかしながら「物」を扱って生きていくという考えは薄れることがなかったようです。研究や技術と名の付く仕事を志すようになり、長い学生生活を経てようやく4年半程前に社会人になりました。助手として採用して頂いたわけですが、9年も大学に居たにもかかわらず、大学のスタッフという仕事をとらえ切れていなかったようです。学生時代に諸先生方に散々お世話になっておいて恥ずかしい限りなのですが、「人に教える」立場で「人に接する」仕事だということに職に就いてようやく気付いたのです。

実は教育学部出身の筆者なのですが、大学に入る段階であまり深い思慮をせぬまま入学しました。その後教員免許も取らぬまま、大学院から理学部へ進学してしまったため、教育という言葉を意識して考えたことがありませんでした。そこで、「教育」という言葉を筆者なりに少しだけ紐解いて見ることにしました。教えて育てる、これは呼んで字の如く。国語辞典では大した事が書いていませんでしたので(失礼)、広○苑をあたってみると、「人を教えて知能をつけること。人間に他から意図を持って働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」とありました。なんだか偉そうな上に下線部の文脈に何か違和感があります。一応、大学の図書館まで行きましたがピンと来る書籍も見当たらず、しょうがないのでweb検索(wikipedia)で。すると、「人間が潜在的に持つ様々な能力を引き出したり、人がそのままでは持たない知識・技能・態度などを身につけさせたりという手段によって、個人がより良い方向へ発達し、またそれによって社会が維持・発展することを目指した活動である」とありました。侮れませんがwikipedia。少なくとも「それによって社会が維持・発展することを目指した」という認識がそれほど明確には筆者にはありませんでした。一大事です。

「社会の発展」を意識することができただけでも収穫ですが、言葉の意味がそれなりに把握できたからといって、学生実験や研究室の学生さんに対して具体的な方策が取れるわけではありません。研究をしている限りは難解な現象や理論に突き当たります。多様な現象や理論を学生さんに理解してもらおう(もしくは理解した気になってもらう)ことは容易ではありません。そこで、常套手段ではありますが、「なるべく平易で身近な事柄と置き換えて説明してみる」ことにしました。この方法で、とある学生さん(A君)にある現象について説明してみたところ、フムフム、と頷きながら聞いてくれたので、効果あり、とそのときは認識しました。ところが後日、A君がさらにB君へ説明しているのを聞いてみると、A君は「平易で身近な事柄」のみが伝わっていたようで、肝心の現象まで話が届いておりませんでした。失敗です。本末転倒とすらいえません。

ふと、思い出したことがありました。中学生の社会科の授業のときのことで。試験でもほぼ一問一答の社会科だから成せる業なのですが、その先生が編み出した策は「クロスワードパズルで覚えさせる」というものでした。ひょっとすると作ってしまえば、授業中に行なってはただの手抜きなのですが、パズルを解く感覚で勉強してもらえる点はかなり効果的です。最近はずいぶんクイズ感覚で試験問題を解く携帯ゲームなんていうのもあったりします。結局のところ、「興味を持ってもらえるか(関心を引くことができるか)」ということと「取っ掛かりが単純であること」というのがとりあえずの打開策となるのでしょうか。確かに大学のオープンキャンパスでも、無理に難解な研究の紹介をするよりは、単純でも良いので実際に分かりやすい実験をしてもらう方が好評のようです。

なんだか似たような絵を見たことがある気がします。そういえば、分子生物学や細胞生物学といわれる分野は、非常に複雑であるにもかかわらず、単一の生体ごとに体系化して構築されています。これは、医療等に密接にかかわるため人気があり、研究人口が多いことがこんな結果を生むのかと思っておりました。ところがその後、大概の研究室においては、実験操作が完全にプロトコル化されていることを知りました。このこともおそらく、これらの分野を加速させている要因になっているでしょう。確かにこれなら、一通りの手順さえ教えてしまえば誰でも同じ結果が出るのかもしれませんが、興味の対象となる物質の情報を得るには、とても他をフォロー仕切れないためだと思います。単純に言ってしまうと原理を知らずに電子レンジを使うのときほど変わらないとは思いつつも、そこにジレンマを感じずにはいられません。

いくら考えても答えは出ません。というよりは、この仕事を続ける限りは今後も悩まされ続けること請け合いです。まあ、あまり考えすぎでもどうしようもないので、とりあえず明日は学生さんに電子レンジの仕組みから教えてみようと思います。次回は、渡米して研究生活を満喫中(?)の福島大学の高貝慶隆先生にお願いしました。

〔秋田大学工学資源学部 藤原一彦〕